

物 資

東立府より五十萬元に相當する各種物資世界紅卍字會中華總會より米多量

佛●國●及●屬●領●

現 金 約十九萬圓

物 資 新聞組合主催の約二百萬法に相當する病院

伊●太●利●

現 金 「ローマ」法王廳の約四萬圓

物 資 政府支出に係る百萬リラ等にて購入せる物質

白●耳●義●

現 金 約十二萬圓(皇帝及び政府 後援の下に組織せる救濟委員會募集の醜金)

和●蘭●及●屬●領●

現 金 約二十萬圓

埃●國●

現 金 約五萬圓

物 資 政府寄贈に係る醫療材料一式

瑞典

現金

約五萬圓物

物資

震災直後支那に碇泊中の汽船に米約三千袋を積載して本邦へ急行

暹羅

現金

約五萬圓

墨西哥

現金

約五萬圓

村の施設と活動

イ、概説

午前十一時五十八分の一瞬點を境として、突然、光明な、平和の光から、闇黒な、騒擾混亂の世界へ突落されたので、一時は誰れでもが五里霧中の裡に彷徨して居つたかの觀があつた。

そこで、村では、早速緊急村會を開いて、役場、駐在所、各區長、伍長、在郷軍人會、青年團等をもつて一團とし、東奔西走、晝夜を分たず臨機應變の措置を執つて、應急策に遺漏なきを期した。其の概要は左の通りであつた。

ロ、中井村復興協議會

四日の中井村會での決議の結果、中井村復興協議會が生れた。是れ

は、村長を會長として、議員には、村會議員、區長、學識經驗手腕完備の有力者を以て組織せられたもので、物價の調節、食糧問題の解決、貨銀の制定、物資の配給、復興への方策等を審議し、解決し、村の危急を救護し、復興を促進するのが目的であつた。

▲食糧問題 各字の所藏米數量を調査し、現在貯藏米麥は、一切他方へ賣却する事を禁じ、同時に相場釣上げ、賣惜み、買占等を防壓する爲めに、公定相場を判定した。夫れは

米 一俵 十三圓五十錢

大麥 同 四圓五十錢

小麥 同 六圓

等であつて、時の相場より、何れも五十錢安を標準した。一方、緊急勅令中の『暴利取締令』の趣旨の貫徹に努め、糧食の供給の圓滑を計つた。

▲鳶職、人夫の割當 家屋の半潰、倒潰急造バラツクの建築等の爲め、鳶職、人夫等限りある人員に對し、無限の需要を想起したので、遂に此の爭奪を起した。其の爲め復興の連延をさへ見へそふな形勢となつたので、九月十日、村内の鳶職を集め、是れを四組に編成して、一字を二口宛として村内を一順することにした。

第一組 下六ヶ村 二日

第二組 上六ヶ村 二日

第三組

境方面

二日

第四組

井ノ口

二日

是の賃銀は、非常時でありますので、特に食事別として、一人二圓二十錢、道具はキリン一挺一日五十錢として他の道具代は判らない事に決した。是れが爲め應急修理も比較的早く終つて、村民に安神と休養とを與へる事が出来た。

▲賃銀の制定 前にもいつた様に、働く者に對する需要が、無限に増大したので、賃銀の暴騰を起し、漸次に上る計りなので、其の公定の必要を痛感して、次の通りに決定した。

	食事自辨	食事附	食事自辨	食事附
大工	二、七〇	二、二〇	鳶	二、六〇
石工	三、〇〇	二、五〇	其他	二、七〇
人夫	一、七〇	一、二〇		二、二〇

▲物資の配給 關東大震大の飛報が、一度全國に傳はると、西からも東からも、厚い同情が湧いて、或は食糧品、營養品、寢具、衣服、學校の器械標本等を山と寄贈せられたので、是れと名字の被害程度を調査した結果、其の必要に應じて配給し、救済に努力した。(是の詳細の數字は別表を御一覽願ひ度い。)

▲傳染病の豫防 震災後は生活状態が一變した爲め、或は食糧不足から、飲料水から、又は家屋の不

完全から起り易いのは、コレラ、チブス、赤痢等の傳染病の發生し易い爲め、是れを未然に防ぐ爲めに、各種の措置を執つた。

イ、傳染病早期發見 恐ろしい傳染病も早期に發見すれば、蔓延を防ぎ得らるゝ計りで無く、全快も遠いので、役場吏員、區長衛生長、駐在所等協力して、各方面に出張して、一面衛生上の注意を與へると共に、檢疫的戸口調査を行ひ、防疫措置に遺憾なきを期した。

ロ、井水汚水汚物の消毒 井戸の埋没、崩潰を調査した結果、八月三十一日に於ける全村の堀井戸が五百五十であつたのに、二百五十は、埋没したり濁水したりして居り、崩潰埋没を免れた井戸も、濁つて使用に堪へないのを發見したので、水不足の處へは近隣より之れが供給の道を調べ、他面『クロールカルキ』消毒を施して、水より起る病氣を防いだ。

ハ、飲食物 牛乳等の検査、飲食物に關する常識を與へると共に、注意を教へ、牛乳の検査を嚴重にして、搾乳業者へ特に注意を拂はしめた。

▲煉乳の供與 乳兒又は重病患者であつて、營養に事を欠いた場合を發見した時は、直に煉乳、牛乳等を給與して、營養を助けた。

▲醫藥、衛生材料の蒐集と配給 重傷病者は應急措置が焦眉の急であるので、四處に人を派して是れを集め、醫師に配布して遺憾なきを期した。

▲小作問題の解決 共存共榮を以て村是として居る本村にあつては、從來、小作問題の爲めに、小作人と地主との争鬭や問題を惹起した例はなかつた。蓋し是れは、村内に純小作人の殆ど皆無であつて、大多數は、自作兼小作農であるのと、地主側に於ても、其の社會的並に經濟的地位を自覺して居つて、諧和協調を計つて、共濟の美風を發揮する事に腐心して居る關係からで、這般の大震災に際しても、地主側は、小作人側の苦痛を察し、相當手段を講じて來たが、夫れでは、區々となつて、解決に困難を來してはこの見地から、小作料割引率を決議し、一率之れに依つて解決することになつた。即ち次の通りであつた。

田 畑

舊中村 一割減

二割減

井ノ口 一割減

一割減

ハ、役場の活動 役場は、震災と共に事務所を半潰せられたので、一時中村報徳信用組合事務所に移轉して、吏員は各々事務を分掌して『中井村復興協議會』と合し、步調を一にして、日夜を分たずに活動を續けた。

殊に震災後は、恩賜金の問題、配給品、證明書、届出書、申請書等は、急激に増加したので、能率の増進を計つて、事務を進捗させ、又、松田の郡衙に毎日徒歩聯絡を執つて、情報の蒐集に務め、是

れを得るに從て村に揭示、配布して人心の靜穩に務めた。

一〇八

二、議員と區長 九月四日以來、殆ど隔日又は三日目位に村會を開催して、各方面の情勢を調査し、是れに基て、時宜の措置を講じ、中井村復興協議會を起し、協力して救護と復興の途を計つた。又、各區長は、一面協議會議員として、連日活動を續けると同時に、他面區長として、各字内の衛生、救護、配給、調査、報告、示達などに、身を忘れ、家を忘れて活動した。其の爲めに、救護も圓滑に行はれ、復興促進の因を作つた事は、誰れしも感謝に堪へない事であつた。

今、當時、挺身事に當たられた、此等功勞者を列記すれば次の通りである。

議員 松本丑松 原濤三郎 石井留吉 相原堅吉 小沼吉治 相原磯五郎 關野太平治 關野初五郎 尾上國太郎 尾上信太郎 金子九八郎 加藤清八 權守松太郎 尾尻倉次郎 武井好藏
古宅廣三郎 須藤辰八 石井國藏
區長 成川彌太郎 市川彌惣治 内藤儀太郎 尾尻倉次郎 山口清次郎 關野太平治 石井國藏
小泉治兵衛 多田惣兵衛 植木源六 松本丑松

村農會の活動

家は潰れ、田畑は荒れ、山は崩れて、村人の生活の根底は、瞬時にして覆された。それ計りか、銀

行は戸を閉め、信用組合は會員以外には如何とも出来ない、金融機關は全く杜絶した。しかも、日用必須の品物は一切現金である。農家の資本である肥料は、よし現金を並べても、必要量だけを手にする事は困難であつた。一方に金の工面の途が塞り、他面には物資の供給の途を絶たれ、村は將に荒廢の一大危機に立つた。

此の時奮然として此れが救済の矢面に立つたのは、村農會であつた。村農會では、最初各方面の肥料高の協議交渉を續けたが、一切は現金制度と變つたので、資金の皆無となつた農會としては、一枚の豆粕さへも手に入る事は出来ない。又金融杜絶の結果一錢の借入れも不可能となつた。しかも肥料の必要は、秋の作付を目前に控へた時、急務中の急務であつた。

そこで、村農會は、直に縣農會に走つて、村の現状を訴へ、大正十四年七月迄に返済の約の元に、肥料の借入れを交渉した結果、次の様に肥料を村全體に配分する事が出来た。

種 類	數 量	價 格
豆 粕	二五九〇枚	六、三一九・六〇
過磷酸石炭	一九一〇俵	三、六二九・〇〇
種 粕	四六九俵	三、一一八・八五
アンモニア	一五八袋	二、五六四・九七

アンモホース 八一袋 一、七〇一・〇〇

合計 一七、三三三・四二

それから、震災の爲め、納屋、小屋等の破壊されたものが多く、物品の保管、穀類の調整等に著しい不便さを感じたので、村農會は卒先して、農業倉庫、共同作業場の建設を計畫し、縣に補助を申請して、村内に各二ヶ所宛の農業倉庫と作業場とを完成し、倉庫としては、穀類、肥料の共同購入、販賣物の一時保管を營み、作業場としては、穀類の調整、包裝其他を行つて、村民の被害額の軽減と、復興の促進とに畫して來た。今、其等倉庫並に作業場の明細を擧げて見ると、次の様になつて居る。

農業倉庫所在地

松本十四番地の二 建

農業倉庫

所在地 建坪 様式

松本十四番地ノ二 十八坪 トタン葺

北田五百二十六番地ノ一 十八坪 同前

作業場

松本十四番地ノ二 比奈達二百六十一番地

在郷軍人の活動と青年團の奮闘

在郷軍人中井分會にあつては、震災直後、直に緊急會議を開いて、軍隊で受けた教育と多年鍛へに鍛へた軍人精神を發露して、東奔西走、或は近隣の倒潰、半潰家屋の取片付けの手傳ひとか、犠牲者や、負傷者への慰問やらに、日も足りない有様であつた。

青年團員も、在郷軍人に合して、夜警に、道路の修復に、或は小學校の取片付け、校庭の修理に、一切の努力を盡した。是れを今、記録から見ると、勞力援助には、九月二十五日から二十八日まで、毎日十五人宛、倒潰した學校の復舊事業と、石垣の倒潰した片付けに、努力し、十月二日から七日まで六日間は、破壊道路の改修事業に二十人宛が出動し、又一方、鮮人襲來の飛報に、火災の豫防に、晝夜二百二十人宛が、班を作り、組を成して、警戒の任に當り、事故を未然に防止した。

又十月十九日から二十八日迄の十日間に亘つて、青年團と聯合の上、毎日三十人宛、學校々庭の凹凸の修繕と、各大字から、小學校に通ずる道路の修覆事業に従事した。

是れが爲めに、静岡支部からは、震災活動補助として、十一月二十九日三十圓を贈られ、罹災救護の爲め九十七圓を寄せられた。

在郷軍人會員での罹災實數は、倒潰八十六戸、半潰百四十六戸で、不幸相原音次郎氏、赤坂貞司氏、

大川文吉氏、小島彌平氏の四名の會員を失ひ、八名の負傷者を出した事は、悲しんでも、尙餘りある事といはねばならない。

當時の在郷軍人會の役員を擧げ、其の勞を謝すと共に、震災時に盡された時發揮せられた軍人精神の如何に貴く、美しいものであつたかを忘れ度くない。

分會長 須藤辰八

副長 大原伊八 小林亮三

幹事 關野傳次郎

理事 城所彌太郎 同 相原彌一郎 同 原 恒 同 武井松壽

評議員 城所嘉平 歲田由五郎 加藤樂一郎 城所彌太郎 野地暉義

早野康太郎 森 正雄 諏訪部義雄 重田健三 曾我銀藏

加藤太一郎 平井義三郎 相原萬藏 相原芳太郎 及川竹造

近藏喜代治 尾上三吉 大原浦吉 原 恒 川口源太郎

處女會の活動

由來本村には、舊中村と井ノ口との二つに大別せられた部落に、各々獨立した處女會が設立せられてゐる。然し、兩者共に、其の活動に就ては、大同小異であるので、一括して記述しやう。

日頃の訓練如何に完全であつても、大の男さへ、突發した災變に、忙然として爲す處を知らなかつた時、或は鮮人襲來の報に、又は餘震の流説に、花恥らう二八の乙女の集團に對社會的、對民衆的の活動と求めるのは、求むる者の無理である。從て團體としては、何等看る可き業績は無い。唯だ處女會々員中に二名の死亡者を出したのを、後日に到て回向し、追悼し、以て友とし、會員としての誠を盡したわけであつたが、會員一同が、災後家庭に在つて、献身家事に盡し、父兄に後顧の憂を少からしめた努力は、流石處女會々員であると思はしめた。

青年會役員

團長 城所惣平

副團長 加藤義男

主事 岩本義宣 相原三四郎 相原規壽

石井文衛 岩本四三郎

理事 佐藤宇八郎 關野義長 金子繁明

成川延秋 尾尻兵藏 武田義男

山口豊久 野地基憲 大川邦五郎 相原東壽

柏原市三郎 小泉仁太

郎 尾上林 多田兵太郎 原常七 權守長吉

顧問 加藤内藏之助 城所源助 磯崎覺平 露木虎治

評議員 中村榮之助 高橋浦太郎 西島門量 柿沼信道 島澤大仙

報徳社の活動

一一四

元中井村助役であつた相原舜次郎氏を主盟とする報徳結社は、現在村内を通じて、比奈窪、松本、雑色、鴨澤、境(原)久所、井ノ口宮の七ヶ所がある。謂ふ迄も無く、報徳社は、相模の生んだ偉人二宮金次郎先生の遺訓を奉じて、徳に報ゆるに徳を以てし、實踐窮行、畏天、事天、忠孝を本に、富國、安民、修身、齊家、致富、永安の方法を講ずるもので、偉大な教化團體として、世人の已に熟知せられてゐる處であらう。

震災の突發と共に、報徳社は平生の教へに従て、或は食糧品を寄贈したり、勞務を以て村に奉仕したり、内にあつては、罹災者を訪れて慰問、教化に務め、思想の激變を防ぐなど、隠れた方面に多大の力を盡した。

宗教團體の活動

各寺院に於ては、申合せの結果、不幸震災の爲めに、貴き生命を失つた犠牲者の爲めに、村に圖つて、十一月一日、追悼會を中村尋常高等小學校庭に開いて、其の冥福を祈つた。爾後毎年九月一日には、協力して追悼會を開く事にした。

然し、各寺院に於ては、各々、自寺の檀家に死者を出した場合には、懇ろに巡廻回向し、他面、犠牲者を出した家の人々に、精神的の復活を興へ、勇猛心を起さしめ、表面に現はれない、地味な、然も強い、雄々しい活動を續け、背後にあつて、復興に盡した事は、筆紙も遠く及ばない事であつた。

警察の活動

地震の突發と共に、交通、通信の兩機關破壊され、松田警察署との連絡絶へ、餘義なく徒歩を以て、比奈窪、井ノ口兩駐在所で、互に連絡を執りながら、臨機の處置を採つた。

▲流言蜚語 九月二日頃より、鮮人來襲の説か、電波の様に傳つて、村内一圓に大不安を興へた。然し其の真相を明にし度くも通信機關破壊の爲め、五里霧中の間に在つたが、務めて、風説の縮少を計り、民心の平靜に歸す様に腐心したので、約一週間程で、立消へた。

▲緊急勅令 緊急勅令の發布を明にすると共に、直に是れを村民に知らしめて、暴利取締、安寧秩序の維持に務めた爲め、暴利取締令に依つて、戒告を受けた商人六名以外には一人の違反者をも出さなかつた。

▲村内の調査 村内一圓を巡廻、一切の震害の調査を行ひ、震災の實狀に對する報告の蒐集に務め、他面、震災後の衛生事項に注意し、傳染病の未發に努力した。

青年の勞力奉仕

地震の爲めに大破を蒙つた、國有鐵道線路修復の爲め、多大の人員を要するのを聞いた當村青年の一部は、震災後直に二宮、國府津間の方面に出動して、其等の修繕を援助した。是れが爲め、政府は一日二圓五十錢の割を以て、是等青年の勞に報ゆる處があつたが、其の總額は約一十三四百圓の額に上り、青年並に本村は、臨時の收入を得て、災後の苦境を切抜けしに、大に助けとなつたのであつた。

一本の矢と三本の矢

(一)

餘震は未だ續いてゐる。夕陽は走々と照り付けて、皆なの不安な顔を、物すごく彩つてゐる。

其處に、夕陽に背を向けて、集つた十餘人の人に話して居るのが、伍長の金子新二郎君であつた。

『皆さんが御覽の通り、村中、何處も彼處も、潰れたり崩れたりして、全く見る影もなくなつて了つた。此の潰れた家を起す計りも大變な仕事で、今日明日の間には合ふ筈はない。だが、私達は誰れも彼れも、今夜から寝る處、食ふ處を探るか、作るかしなければならぬ』

金子君の話は、段々に熱が加つて來た。聞いて居る十餘人の人の顔にも、一言も聞き逃すまいとい

ふ色がサット迸つて居る。

『そこで、私の考へる處では、この一組が團結して、一時應急バラックを作り、皆さんの家の復讐まで、共に働き、共に助け合つて、此の危急を切り抜けるのが、最も賢明な而して當を得た事かと考へますが、皆さんの御考へはどうでせう？』

『賛成だね。何にしる此んな時期に、名々が、勝手に働き、思ひ通りの行動を執つて居たのでは、復活どころか、闇を一層闇にする計りだ。闇の内から光りは生れるんだ。いや闇の内に光を點じて、光明世界に躍進する事は是れに越した策はあるまい。』

男性的な元氣に満ちた聲はした。皆なは其の聲に思はず見れば、其れは萩原一三君であつた。

『そうしやう。其れが最善の策だ』

十餘人の頭には、もう希望の光が燃へ出した。忽ち、各人が各々、自分の能に應じて働き出した。而して急造バラックは出來上り、十家族は是れに假の安住の地を見出した。

(二)

『ところで諸君！斯う氣の合つた十家族を見渡した處が、お互が、トントンに暮して居る者計りだ。金持は逃げて、別個の行動を執つて居るが、是等の人々の物質になる様な事があつては、我々の面目にも係はる。それで……』

暗い蠟燭の光を浴びながら、楽しく取つた晚餐の後で、萩原君は、世間話のかたはら、相談を持ち掛けた。

『此のバラツクの十家族は、皆な能が違つて居る。十人十色といふ通り、仕事に因て、器用不器用があるから、何んでも、外で働ける者は皆な外で働き、勤めの人は、毎日勤めて、得た金は、一切共有として帳簿に掲げて置いて、必要に従て支出し、共存共榮の實を上げて、最後の解散の時、一切の計算を建てるやうにしたら如何だらう。』

是の名案には、何人も不服はなかつた。此の大家族は、組の諸星一太郎氏の妻女の死を、水を集めて清め、僧侶を請じ、組合葬として厚く靈を吊ひ、晝は互に極力働いて、夜は夜警して、萬一を警め、十日間の共同生活に、十家族は家を起し、直して、非常な僅少な經費を以て、復興の第一歩に就いた。而して、一本の矢は折れ易いが、三本の矢は折れ難いといふ事を體驗し、解散後も、一家の様に協力一致、共存共榮の實を擧げてゐる。此の十家族とは、金子新二郎、萩原一三、曾我久吉、諸星一太郎、金子ミネ、金子太治平、金子量之助、力泉喜太郎の諸君である。